



紙の平原を「考え」が走り回る 齋藤孝

紙に埋もれて暮らしている。大量の本と書類が散乱する中で仕事をし、生活している。紙に乗っかってよく滑る。最近飼いだめた子犬もよく滑っている。

こんな状況でも紙のない生活には耐えられない。紙がなければ脳が止まってしまつ。私は本を読むときに、青赤緑の三色が入ったボールペンを使って読む。青はまあ大事、赤はずごく大事、緑は主観的におもしろいという基準だ。三色を引いた本は、自分の本になる。買って所有権を得たとしても、まだそれは本当に自分の本とは言えない。自分の脳みそに一回くぐらせて出てきたものは、染め物のように自分流の本になっている。

研究や会議のための大量の書類をこな

すときにも、三色で高速に処理していくキーボードをぐるぐる巻きにしてあげ、そうすると、書類が図のようになる。言葉があちこちでカミフルに浮かび上がってくる。すると、それが映像として脳に残る。

紙は記憶するのに向いている。受験勉強をしているときに、世界史などの細かい知識を覚えるときも、それが右下にあった言葉が左ページにあった言葉を間違えることはない。場所とセットにした記憶は強い。しかもそこに自分の手が加わっていればなおさらだ。

私は人と話すときにマッピング・コミュニケーションというやり方を使う。真ん中に紙をおいて、そこにキーボードや矢印を書き入れながら話をすると、これをしながら打ち合わせをする。と、どんなアイデアが湧いてくる。脳みその中身を紙の上にぶちまけて、混ぜ合わせるような感じだ。フレイミング・ノートリングは紙の上で全開する。

これは私が友達と中学校の時からやっていたやり方だ。仕事もすべてこれでやっている。子どもを叱るときも、紙に書く。長々しいお説教にならなくて済む。同じことをくたぐたと言っ繰り返してしまつ堂々巡りの回路には、私毛はまりがた。



明治大学にて

齋藤孝(さいとう たかし) 1960年静岡県生まれ、東京大学法学部卒業。同大学院教育学研究科博士課程を経て、現在明治大学文学部教授。01年『身体感覚を取り戻す』が新潮学芸賞を受賞。『声に出して読みたい日本語』『理想の国語教科書』『働く気持ちに火をつける』など著書多数。NHK教育テレビ「にほんごであそぼ」の企画・監修を務める。

とくにお酒を飲んで夜遅くなるこの危険が高まる。そんなときも、紙に言葉や図を簡単に書くだけで、ずいぶん明るく生産的になる。

一人で喫茶店などで考え事しているときも、いつも紙に何か書き付けながら考える。一人なのに、対話をしている感じになれる。白い紙は、自由の平野だ。そこに大胆に言葉を走らせると、時に遊牧民のような感覚だったり、時に建築家の感覚だったりする。自由に遊んだり、構築したりするのだ。

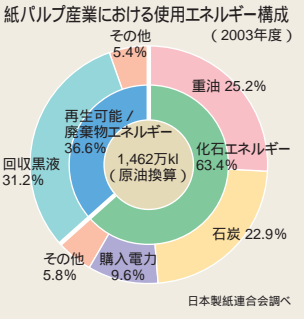
文章を書く前も必ず白い紙に項目を書き出して、再構成して構築してから書き始める。これは小学校の作文の時から習慣だ。

私は「考える」という活動が好きだ。人生の大半を「考える」ことで過ごしている。私は、紙という真っ白なフィールドの上でいつも考えている。紙の上で「考え」は野生の動物のまじりに走り回る。

PAPER Q&A Vol.11

Q. 製紙産業のエネルギー利用の特徴は何ですか?
A. 製紙工程で出る廃液をバイオマス燃料として有効活用。エネルギーの約3分の1を賅っています。

バイオマス燃料を利用することで、地球温暖化の原因となる化石燃料の使用を減らすことができます。製紙産業では以前からこうしたエネルギーを積極的に利用してきました。それが黒液の利用です。木材の中の約50%がパルプとして紙の原料になります。それ以外のリグニンを主成分とした廃液(黒液)は有機物であるため、燃やせばエネルギーになります。今では、使用エネルギーの約3分の1を黒液で賅っています。



製紙で、オフィスで、家庭リサイクルの輪、まげよう

今回は4月7日号、谷村志穂さんです。



提供 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>